

懐かしい街、函館に生きる記憶

松村菜乃夏

キーワード: 記憶、もの、想起、懐かしさ、外的景観、内的景観

要旨

本稿の目的は、函館の西部地区における懐かしさと記憶の様相について、エスノグラフィーの手法を用いて明らかにすることである。西部地区における、ものや建物と記憶の関係性について詳細に検討するとともに、懐かしさを感じる観光客に見えている景観と、時に衝突する現地住民の感情について考察を行う。

本稿は7章からなる。

第1章では、研究背景と研究目的を述べる。

第2章では、先行研究のレビューを行う。第1節では記憶に関わる研究を紹介し、アルヴァックスの集合的記憶論などについて説明する。第2節では心理学者の楠美を参考にしながら「懐かしい」という感情について説明する。第3節では床呂・河合に依拠しながら“もの”のもつ主体性について取り上げ、第4節では、函館と記憶に関する先行研究について紹介する。その上で、第5節では、本研究の位置づけを確認する。

第3章では、事前調査として調査対象地である函館の歴史を概観する。また、西部地区が「レトロ」やノスタルジーと結びついた景観として函館市の公式観光サイト等で表象されていることを紹介する。

第4章では、本研究の調査概要について述べる。

第5章では、数度にわたり実施した街歩きについて写真を交えながら紹介していき、西部地区において「記憶」と結びつき、過去を想起させるような“もの”がいかにかに点在しているのかということ明らかにする。また、西部地区に長く根を下ろした5つの商店、書店、水産加工会社、バラエティーショップに訪問した結果を記す。それぞれのお店には、お店の記憶を継承する様々な「もの」があり、それらの“もの”に浸されながら生活する方から聞き取った語りを記す。続いて、懐かしさ

に関して、観光客に行ったインタビューと地元住民へのインタビューの結果を述べる。また、函館市主催の街歩きイベントに参加した結果を記す。

第6章では、第5章の調査結果を整理しながら、分析を行う。お店や建物の中には、お店や建物特有の歴史と結びついた“もの”があり、それらが記憶を引き出し、過去を語ることを可能にしていた。町全体には、より大きな文脈の歴史を示すような“もの”が設置されており、その場所の過去を想起させる力をもっていることがわかった。

また、観光客が抱く懐かしさは創り上げられた「外的景観」に基づいたものであり、その懐かしさとはかけ離れた「寂しさ」を地元住民が抱いていることを明らかにした。

第7章では、分析の結果をもとに、設定した問いへ答える。西部地区の様々な場所に点在する「もの」が、それぞれ異なる力を保持し異なった方法で人間に影響を与え、現在に記憶が立ち現れるように作用していると結論付けた。

また、観光客は創り上げられた「外的景観」に懐かしさを感じる一方で、現地住民が生活を営みながら見ている景観は「寂しさ」を含むものであり、それは時に衝突することもある。しかし同時に「外的景観」の形成に現地住民が関与している場合もあり、「外的景観」と現地住民から見える景観は重なり合うこともある。